

## メッセージアウトライン

### 創世記 3:14 ~19 「神のさばきとのろい」

[14]「神である主は蛇に仰せられた。『おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。』」

この箇所は単なる神話が語られているのではない。これは、神に敵対し、人間を神に敵対させるサタンの存在とその現実を、その道具としての蛇と二重写しにして説明しているものと思われる。動物としての蛇は「あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれたものとなった。それは、蛇自身が直接罪を犯したからではなく、サタンによって人を墮落させる道具となったからであり、そのことを絶えず人に覚えられるためであった。以前の蛇がたとえ直立歩行ができ、どれほど美しく、魅力的であったとしても、これから後は腹ばいで歩き、人に恐れられ憎まれる対象になったのである（今日、蛇の中には足の痕跡器官が確認できるものもある）。「地のちりを食べる」とは地のちりのついたものをそのまま食べなくてはならないという意味であろう。

[15]「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく』」

のろいは表面上、蛇に対して宣告されたが、その真ののろいは蛇を人間の墮落のために用いたサタンに対するものであった。サタンは最初の人間を自分の支配下に置くことができるならばその子孫も味方にでき、他の墮天使（悪霊）と共に神に敵対し、神をその王座から引き降ろすことができると考えていたのかもしれない。しかし、神はサタンと女との間に、また、サタンの子孫と女の子孫との間に敵意を置くと言われた。これは原始福音(最初の福音)として今日では知られている。サタンの子孫とはサタンに従い、罪の贖いに関する神の目的に敵対する者たち(ヨハネ 8:44, エペソ 2:2~3)。女の子孫とは信仰によって神との正しい関係を作り出す人たちのこと。そしてそれは究極的には神の御子イエス・キリストを指す。サタンは彼のかかとかみつく（十字架につけて殺すことによって）。しかし、キリストはその十字架の死と復活により人間の罪の贖いを成し遂げサタンの頭を踏み砕く。そして最終的にサタンは滅ぼされる。→黙示録 20:10

[16]「女にはこう仰せられた。『わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。』」

妊娠と出産に関して、特別の重荷が女の上に置かれた。その身ごもりの苦しみは大いに増すことになる。出産と母となることは本来、神の喜ばしい賜物として与えられたものであるが、この世への人間の出生には特別の苦しみが伴い、人の罪の結果を常に思い起こさせるものとなるのである。そして、また、女は「夫を恋い慕い、彼はあなたを支配する」こととなる。

これ以後の人間の長い歴史は、この預言的なことばの正しさを示している。

[17-19]「また、人に仰せられた。『あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはなら

ないと私が命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生苦しんで食を得なければならない。土地はあなたのためにいばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。』』

人が地を耕し、守った時(創世記 2:15)、には思い通りになっていた地が、のろわれて、思うように食物を生じなくなり、そればかりか、地はいばらとあざみを生じ、地から食物を取るのに労苦と汗と涙を必要とするようになった。そして人がどのように努力しても、ついに死が勝利し、人のからだはちりに帰ることになるのである。

「いばらとあざみ」とはそれまでの植物が有害な特性を持つようになったということを意味し、それは植物を悪化する突然変異等によったものと考えられる。またこの神ののろいは神の創造されたものの全方面に及んでおり、土地の保持や浄化のために造られた細菌や微生物も変異し、それを摂取した他の生物に有害で死をもたらしものとなり、草食用にデザインされた動物の歯や爪が牙や鉤爪に変異し、次第に肉食となっていくことも考えられる。(最初はすべての動物は草食であった。→創世記 1:30)

神は人間とそのすべての環境に呪いを下し、人間の罪の深刻さを知らせ、また、自分自身と管理し支配するために与えられた回りの世界を死と滅びから救い出す力がないことを認めざるを得ないようにされたのである。しかし、このような状況は、また、人を神に対する悔い改めへと導く願いを起こさせるものでもある。そこに救いへの希望がある。→ローマ 8:19~22

生物も無生物も、あらゆる物はついに滅び、朽ち、年を取り、ちりに帰るという事実はこの世界で広く経験されることである。この傾向は現在では熱力学第二法則と呼ばれている基本的科学法則にまとめられている。この法則は、すべての系は放置されるなら崩壊し、自滅する傾向にあることを教えている。この世界は進化していくのではなく退化し崩壊する過程にあるのである。人間の罪はこのような神のさばきとのろいをこの世界にもたらしたが、「女の子孫」として来られる神の御子イエス・キリストがやがてサタンの頭を踏み砕き、この世に救いをもたらすときが来るのである。

それは現在の私たちから見ればもうすでに実現しつつあることである。この神の救いの事実に私たちはどれだけ感謝をささげたらよいだろうか。→黙示録 4章